

## 大東亜戦争からの宿題

——近代の超克——

埼玉大学教授

長谷川 三千子

皆さんご承知の通り、本年十二月八日は、大東亜戦争開戦五十周年にあたります。

まづ、ごく基本的な、ここにお集まりの皆さんには常識にすぎないことから話を始めてまゐりたいと存じますが、この十二月八日は、あくまでも「大東亜戦争開戦五十周年」であります。日本は正式にアメリカ（および連合諸国）に宣戦を布告いたしましたして、その戦争を公式に「大東亜戦争」と命名しました。その開戦から五十年がたったのですから、「大東亜戦争開戦五十周年」——これ以外の呼び方は考へられません。

ところが、この「大東亜戦争」といふ呼び名それ自身が、敗戦後、占領軍の命令で禁止されてしまった。アメリカ側ではこの戦争を「パシフィック・ウォー（太平洋戦争）」と呼んでゐたわけですが、その名をわれわれに押しつけた。以来、占領軍がひきあげたあとになつても、日本人はあの戦争を「太平洋戦争」と呼ぶやうになりました。「大東亜戦争」といふ呼び名は、よほど志をしつかりと持った人のみが、わづかに使ふ、といふ名になつてしまひました。私が、このやうにまづ呼び名にこだはりたいと思ひますのも、自分達が自分達の戦争を名付けた、その呼び名を捨てて、いつたいてどうやつて正しくそれをふり返ることができようか。その時われわれが何を、何を指してゐたの

かをもう一度正確に見つめ直すといふことが、それを捨てて、どうして可能であらうか、と思ふからであります。

大東亜戦争が太平洋戦争になつたところではありません。いま、あちこちの雑誌などで、この「五十周年」を特集してをりますが、いづれもそれを「真珠湾五十周年」などと銘打つてゐる。

たしかに昭和十六年十二月八日の日本海軍による真珠湾攻撃は、海軍史上にのこる大勝利ではあります。ちやうど、日露戦争の日本海海戦の大勝を記念するのと同じやうにして、その勝利の記念日を祝ふ、といふのでしたらば、それはそれで解ります。ところが、昨今の日本のジャーナリズムの言ふ「真珠湾五十周年」は、それとは丸きり発想が違ふのです。

ご承知の通り、日本の真珠湾攻撃で大打撃をうけたアメリカ側は、それを（それまでは、モンロー主義の伝統もあつて、第二次大戦への参加に消極的であつた）アメリカ国民に対する、絶好の戦意高揚宣伝の材料として利用します。ことに、現地日本大使館の全く愚かしいミスともたつきによつて、宣戦布告の手渡しが予定より数十分も遅れてしまつたものですから、アメリカ側は、ここぞとばかり「汚いジャップ」を印象づける出来事として「パール・ハーバー」を大活用したのです。その印象が戦争後まであとを引いてゐまして、東京裁判と共に「リメンバー・パール・ハーバー」といふ標語は、あの戦争は無言を言はず日本が悪かつたんだ、と片付けるための標語として使はれてきました。

現在の日本のジャーナリズムは、まさにさういふ標語としての「パール・ハーバー」をそのまま引きついで、その五十周年だと言つて騒いでゐる。そして（実はアメリカ人の大部分にとつてはもうその記憶すらうすらいでゐるのに）アメリカ人がまた、これを機に、日本に不満をぶつけてきたらどうしよう、と言つてあわててゐる——もう、哀けないとも腹立たしいとも、何とも言ひやうがございません。

それと較べますと、先日來、またアメリカで新たな対日敵対の書が出たと言つて騒がれた『The Coming War with Japan』などといふ本の方が、よほどまともな、しつかりとした見方で歴史をふりかへつてゐます。

この本は、最後の結論の部分で、いづれ近い将来日米はふたたび戦はざるをえないであらうと予告してゐるので、そこだけを取り上げてセンセショナルに宣伝されてゐるのですが、実はこの本の本領はむしろ、すでに行はれた日米戦争と、その戦後処理についての分析といふところにあるので、将来日米がふたたび戦ふかどうかといふ結論部は、むしろ言ふならば「おまけ」の部分なのです。その肝心の「すでに行はれた日米戦争」についての分析を見ても、著者はアメリカ人とオーストラリア人の二人なのですが、実に公平に分析してゐます。つまり、十九世紀なれば、ほとんど強制的に近代国際社会にくみ入れられた日本——しかも資源に乏しい日本——にとつて、工業立国以外に道はなかつた、といふこと。そして、その日本に対して、当時の連合国がしたやうに、市場からのしめ出しをはかり、さらに資源の供給を断つやうなことをすれば、日本には武力による打開以外の道はありえなかつた、といふこと。さういふことを、統計的資料を使つてキチンと論じてゐるのです。

このところだけを取つても、いまの日本のジャーナリスト達に、よく読んでいただきたい、と思ふことばかりです。

そればかりではありません。この本が役に立つもう一つの点は、戦後の日米関係のあり方を、ありのままに見つめてゐるといふことです。よく、日本人の中にも、アメリカが日本の戦後復興を助けてくれた、その恩を忘れてはならない、などといふピントはづれを言ひたてる人がありますが、さういふ馬鹿馬鹿しいことはこの著者は一切言はない。ただ、アメリカは、第二次大戦後まもなく始まつた冷戦に対応するために、日本をいかに使つてきたか。また日本も、それをどう利用してきたか——要はさういふことなのです。そして、両者の利害に喰ひ違ひの生じるときは、ほとんどいつでもアメリカが自分の言ひ分を通してきた。「アメリカの『従僕』となるか、戦争か」といふ二者択一は、ある意味で戦後もつづいてきたわけなのです。『The Coming War with Japan』といふ本は、大東亜戦争をふり返つて眺めるためにも、また、それが決して終つてゐないことを知るためにも、たいへん参考になる本と言へませう。

しかし、これはやはりアメリカ人、オーストラリア人の書いた本ですので、大東亜戦争についての、一番肝心なところが見えてゐない。何故、われわれ日本人は大東亜戦争を始めなければならなかつたのか？それは勿論、この本が言ふやうに、日本の「自存自衛」のため物理的にやらざるをえなかつた、といふことがありますけれども、そればかりではなかつた。もう一つ、アジアの解放、といふ重大な使命があつた戦争と大きく結びついてゐた。このところを見落しては、大東亜戦争をふり返つたことにはならないのではないかと存じます。

「アジアの解放」といふことは、大東亜戦争を正当化するために日本人が勝手にとなへたお題目にすぎない、といふことを言ふ人があります。そもそも民族自決といふことはそれぞれの民族が自分達ですることなのであつて、同じ地域の中だからと言つてそれを外から手助けするなんて余計なお世話だ、と言ふ人もある。そしてまた、日本人はむしろ大東亜戦争によつてアジアの全域を戦争にまき込み、自ら沢山のアジア人を殺したではないか。「アジアの解放」どころか「アジアの侵略」をしたのではなかつたか——さういふ風に言ふ人もある。かういふ議論がまたぞろ力をもりかへしてきて、昨夏の終戦記念日には、やたらと「加害者としての日本」だの「アジアに対する謝罪」だのといふ言葉が見聞きされました。

しかし、これがいかに見当はずれの見方であるか、といふことを私は強調したい。

たしかに、「民族自決」といふことは、その言葉本来の意味からしても、決して外側からなすとげる性質のことがらではありません。しかし、十九世紀から二十世紀にかけてアジア、アフリカを席巻した、白人達による植民地支配といふものは、実に圧倒的な力による支配だつたのでして、一寸やそつと内側から反抗したくらゐで覆へるやうなものではありませんでした。現在の南ア共和国の反アパルトヘイト運動のことを思ひ出していただきたい。あれだけ、世界中がよつてたかつて圧力をかけて、しかもそれで尚あれだけの時間をかけて、やうやく南ア共和国の黒人圧迫が少し解消した——その位、植民地の白人支配といふものはしぶとく根強いのです。まして、世界中が植民地を容

認し、白人の有色人種圧迫を容認してゐた時代に「民族自決」はそれぞれ勝手にやりなさいなどと言つて放つておいたらどうであるか？それからさき何百年白人の支配がつづくか分かつたものではありません。

そしてまた、大東亜戦争の中で、現実には、フィリピン人やマレーシア人たちが日本人と戦闘をする場面があつたことは事実です。しかし、それは、まさにその国々が、当時白人達の植民地であつた、といふ事実を伝えてゐるにはかならないのです。白人達は、自分達の支配する植民地の人々を、自分達の軍のために徴用し、戦はせました。そこにアジアの解放のために戦ふ日本軍がアジア人達と砲火を交へなければならなくなる、といふ皮肉のものがありました。しかしその皮肉は、つまりは「植民地」といふものの異常な性格から発したことなので、反植民地戦争にとつての、いはば避け難いジレンマであつたのです。反植民地戦争につきもののジレンマが大東亜戦争にもつきまとつてゐた、といふことをもつて、大東亜戦争が反植民地戦争でなかつたと言ふのは、論理的にもおかしいことと言はざるをえません。

結局のところ、真の意味での日本の「自存自衛」は、単に物理的に石油その他の原材料輸入が確保され、市場が確保されればすむといふものではない。世界に於ける有色人種の地位といふものが、白人と対等に認められるものとなつてはじめて、日本の「自存自衛」が真に全うされるのです。当時の日本人にも、そのことが肌身で感じられてゐたからこそ、「アジアの解放」といふ大義名分が、大義名分として受け入れられたのに違ひありません。それが本當に空疎な、とつてつけたものであつたなら、それは「大義名分」としての役割すらはたさなかつたであります。

当時の日本とアジア諸国の独立への思ひがかに共鳴しあつてゐたかといふことについては、これも最近出版されました、深田祐介氏の『黎明の世紀』（文藝春秋）をおすすめしたいと存じます。これは近頃珍しく、背骨のシャーンとした本でして、大東亜共同宣言当時の日本とアジア各国指導者達との交流ぶりがいきいきと描かれてをります。かういふ本こそ、いまの若い人達によく読んで欲しい本だと存じます。

たしかに大東亜共同宣言は、すでに日本の敗色濃くなってきた時期に発せられたものでして、それ故に、アジア各国の指導者の中にもおよび腰の人々が見られた訳ですし、また、その宣言それ自体が、日本の敗戦の中でむなしくなつてしまつたやうにも見えます。

けれども、戦争の勝ち負けにかかはりなく、日本が三年半にわたつて、必死で戦つたことそれ自体が、それまでのアジア地域の枠を大きく揺り動かしたことは事実なのです。その結果、戦後アジアの各国はつきつきと独立をはたします。そして現在では、アジア圏は世界の内でも最も経済的發展力をもつた地域として注目されるやうになつてゐます。大東亜共同宣言の「大東亜を米英の桎梏から解放し、自存自衛を全うし」の大目的は、ひとまづはたされたと言ふことができませう。

しかし、それでは（日本人自身がそれを自ら認めるか否かにかかはりなく）大東亜戦争の目的は、敗戦後四十数年間のうちにすでに完全に果たされて、われわれはもうそんな戦争のあつたことさへ忘れ去つてもかまはないのか？と言へば、決してさうではありません。まだもう一つ、大東亜戦争の抱へてゐた、難しい課題——おそらく、もつとも難しい課題があつたのです。

大東亜戦争が始まつた次の年、『文学界』といふ雑誌が、文学者や哲学者たちをあつめてシンポジウムをひらきました。その題としてつけられた「近代の超克」といふ言葉が、一時期はやりとなつて、戦争中の知識人たちの合言葉のやうなものとなつたのですが、この「近代の超克」といふ言葉こそが、大東亜戦争のかかへてゐた、もつとも難しい課題を表現した言葉だつたのです。

このシンポジウムそれ自体は、のちに多くの人々が批判してゐる通り、いささか支離滅裂なものであります。ただひたすら「現代文明批判」を唱へる人。もつばら伝統への回帰を訴へる人。さうかと思へば、むしろ西洋の文明史

そのものに興味があつてその話ばかりに終始するやうな人もあるといふ具合で、たしかに一つのシンポジウムとしてはこれは失敗であつたと言へませう。

けれども、この人達が寄り集つてかうした支離滅裂なことを言ひ交したその根底には、一種の正確な自己認識といつたものが横たはつてゐた——これも否定できないことなのです。すなはち、自分達日本人は、この百年近く、ただひたすら西洋文明を追ひ求め、それを身につけようとのみ努めてきた。しかし、はたしてそれで良かったのか？ 西洋文明それ自身が、いまや行きづまりを見せ、自ら「近代の超克」といふことを言ひ出してゐる。それを真似して追ひかけてきた我々も、このあたりで、もう一度本来の自分の在り方をとりもどすべく反省しなければならぬのではなにか——かうした思ひが、そこに集つた人々の多かれ少なかれ感じてゐたことであつたのは間違ひありません。言ひかへれば、明治の開国以来、日本人の辿つてきた道を、もう一度ふりかへり、見直してみる必要があるのではないか——「近代の超克」といふ標語の意味するところは、まさにさうしたことだつたのです。

ところが、この「見直し」は、決して単純な軌道修正などといったことで片のつく問題ではないのです。といふのも、明治時代、いきなり近代国際社会のまつ只中に投げ出された日本にとつて、「富国強兵・文明開化」の道は、それ以外に選択の余地のない道だつたからです。

『文明論之概略』の中で、福沢諭吉がいみじくも言つてゐる通り、「商売と戦争の世の中」である近代国際社会の中で独立を保つてゆくためには、西欧諸国に負けない軍備と、西欧諸国に太刀うちできる経済力をそなへることが、不可欠の二大条件です。そして、そのためには、西洋近代の文明を、丸ごと呑みこむほかはない。何故かと言つて、工業も商業も、西洋近代の科学的思考のあり方や、資本主義社会のしくみと制度などと一体になつて機能してきたものだからです。機械だけを輸入しても、それを動かす原理をなしてゐる科学そのものを知らずには、それを真の「自国の産業力」にしてゆくことができない——それをよく自覚してゐたからこそ、明治の人々は「富国強兵」と共に

「文明開化」を時代のスローガンとしてかかげつつ、西洋文明の吸収につとめつづけてきたのです。

ところが、百年近くその道を走つてきて、ふと気づいてみると、「和魂洋才」どころではない。自分達はすでに骨の髄まで西洋文明にからめとられてしまつてゐるのではないか？——かうした反省が、まさに大東亜戦争の開戦をきっかけに出てきたといふことは、或る意味では大變に皮肉なことでもありました。

何故ならば、さきの「The Coming War with Japan」の作者が正確に述べてゐた通り、日本が満州に進出し、中国と対立し、朝鮮半島を植民地化し、そして最終的に対米戦争にふみ切らざるをえなくなつたその道筋は、まさに日本が、近代国際社会に見合つた形で、西洋流の近代国家建設につき進む中で必然的にとらざるをえなかつた道だからなのです。だからこそ、完全に近代西洋的国家観に立つて（しかも公平に）日本の国家行為を眺める人にとつては、そこに何一つ道徳的に非難すべきことは見あたりません。東京裁判で西洋各国が日本のした戦争を断罪してみせたのは、あくまでも彼等の「敵をたたきつぶす」ことの一環としてだつたのであり、彼らとて、自分達が同じことをしたのだつたらば、何一つ道徳にもとるところなしと言つて胸をはりつづけたこととせう。

ところが、ほかならぬ東洋的道德の立場からすると、植民地支配といふことも、また、武力による衝突といふことも、ともに「王道」からはづれたふるまひといふことになります。この「近代の超克」のシンポジウムの中でも、哲学者の西谷啓治さんなどは、「単に国家の直接的な自己拡大」といふものは「従来の世界史に現れた、征服による世界帝国の樹立」でしかないのです、それを否定し、真の「共同性の地平」を目ざすべきである、と語つてゐる。これを延長してゆけば（なり立ちはまだつきり正反対ですが）むしろ戦後の憲法第九条に非常に近い立場といふことになる。

つまり、「近代の超克」の立場をつきつめてゆくと、戦争——近代戦争そのものの否定といふことになつてゆくのです。

もちろん、このシンポジウムに集つた人たちは、西谷さんも含めて、そんな結論を出したわけではありません。一

方では、この大東亜戦争は「戦はざるをえなければならぬ戦争」であり、現に国をあげて戦つてゐる最中に、そんな逆説をとなへてみても、どうなるものでもなかつたのです。

しかし、この中途半端な「近代の超克」といふスローガンは、だからこそ尚のこと、大東亜戦争といふ戦争そのものにひそむ悲劇的な逆説を、くつきりとうかび上らせたものであつたと言へるでせう。

この逆説があつたからこそ、戦後の日本人が、一斉に自分達自身が必死で戦つた戦争にそつばを向いてしまふ、といふ奇妙な現象も起こりえたのです。

そして、考へてみますと、大東亜戦争の開始とともにとなへられた、この「近代の超克」といふ課題は、戦争が終つて何十年もたつた今こそ、むしろもつと切実な課題となつてゐます。われわれは、昭和十七年当時の日本人よりも、はるかに深くどつぷりと西洋文明の中に埋没してゐます。

そして、それを超克してゆくといふ課題が、物理的な戦争によつてでなく、思想的な戦争によつてしか達成されなものであつてみれば、これはまさに現在のわれわれこそが戦ひ、かちとるべき課題であると言へませう。私自身、非力ではありますが、その宿題をなしとげるべく、たつた一人の思想戦を、これからも戦ひつづけてゆく所存であります。